図書紹介（83）

『種痘伝来―日本の〈開国〉と知の国際ネットワーク』

アン・ジャネッタ著（廣川和花・木曾明子訳）　岩波書店、2013 年

おやさと研究所教授
幡鎌　一弘　*Kazuhiro Hatakama*

有史以来、多くの人々が恐れた病気に疱瘡（天然痘）がある。感染力が強く、しばしば大流行した。発症すると高熱を発し全身に水痘疹ができる。有効な治療法はなく、２割から５割の人が死に至った。回復したとしても障害が残る場合があり、その痕はひどいあばたとなった。日本でも、大小の流行を繰り返し、病を恐れる人々の間で、数多くの疱瘡除けの習俗が生まれた。民衆宗教の教祖の逸話にも疱瘡はついてまわる。黒住教の教祖黒住宗忠や金光教の金光大神の子供は疱瘡にかかったことがある。天理教教祖も立教以前に預かり子が疱瘡になったため、娘と自らの命を身代りにしたことが知られている。

むまれこふほふそはしかもせんよふに
やますしなすにくらす事なら　（おふでさき　六号 110）

この言葉を引き合いに出すまでもないことかもしれないが、明治にいたっても多くの人々を苦しめ、神仏にすがる人も少なくなかった。

しかし、そのような病気も、現代社会ではもはや存在しない。1798 年、ロンドンでエドワード・ジェンナーが発表した牛痘はやがて世界に普及し、ＷＨＯ（世界保健機関）の努力により、1980 年に根絶が宣言されたのである。

前置きが長くなったが、本書は、ジェンナーが生み出した牛痘がどのようにして日本に伝わることになったのか、そして日本でどのようにして広まっていったのかを、世界史的な視点から跡付けようという労作である。

著者のアン・ジャネッタは、近世日本を対象にした歴史人口学研究者である。原著は 2007 年にスタンフォード大学出版局から刊行され、2009 年、ジョン・ホイットニー・ホール・ブック賞を受賞して、優れた日本研究書として高い評価を得たという。

その分析は、牛痘に先立つ人痘（東洋で始まった）を助走として（第１章）、ジェンナーの牛痘法が数々の言語に翻訳され、数年間であっという間にヨーロッパに広がっていったことが示される。フランスでは国策として、スペインでは植民地政策の一環として牛痘が推進／強制された。スペインではカトリック教会が協力したこと、牛痘漿が救貧院の子供の体によって運ばれたことが印象的である。フィリピン・中国では 1805 年に種痘が始まった（第２章）。

ヨーロッパなどとは対照的に、日本では種痘は簡単には広がらなかった。牛痘の情報は、1803 年にオランダ商館員からオランダ通詞に伝えられていたが、種痘が広がる国内的条件（蘭学の普及、蘭方医の成長と人脈）がこの段階では満たされていなかったからである（第３章）。シーボルトの鳴滝塾を拠点として築かれた人脈は、彼が国外追放処分を受けたのちも蘭学あるいは種痘の普及に大きな力を持つことになり、種痘の知識と施術の希望はその中で高まっていった（第４章）。

第５章は、種痘を導入することに重要な役割を果たした７人の蘭方医が取り上げられている。佐賀藩主鍋島直正に牛痘法を建言した伊東玄朴、大坂で適塾を開き多くの弟子を輩出した緒方洪庵などである。７人は生まれた地域も職業もまちまちで、おおむね貧しい家であった。そんな彼らが階級社会の日本で成功するために、紹介者による仲介、養子縁組、婚姻（縁戚関係）の三つの慣習を利用したことを、筆者は指摘している。

翻訳された医書の普及、あるいは蘭方医のネットワークを下敷きに、1849 年８月に出島へ届けられた牛痘苗は、急速に各地に伝わった（第６章）。民間の蘭方医の努力は幕府を動かし、江戸お玉ヶ池に種痘所が設けられ、蘭方医は幕府で不動の地位を得るとともに、明治以後、世界的に先駆的な公衆衛生制度を築き上げることになったと結論付けている（第７章・終章）。

私は、自治体史の編纂にかかわるなかで、在村蘭方医の種痘記録を利用したことがある。そのなかで、長崎で伝えられた痘苗が京・大坂を経てやがて村にもたらされたこと、種痘を施術することのみならず、痘苗を切らさずに維持することの困難さを知った。もっとも、そのときには、その痘苗がジャワ島バタヴィアからもたらされていたことや、そこには植民地政策の一環として、村ごとに「ジェンナーの田んぼ」と呼ばれる財源と土地が配置され、種痘医がいたということまでは理解が及んでいなかった。

読者に適切な導きの糸を与えてくれる村田路人・廣川和花両氏の解説は、本書の意義の第一に、日本の牛痘種痘史をグローバルな観点から世界の牛痘種痘史の中に位置づけたことを挙げている。正直なところ、日本国内の種痘の動向をとらえる網目としてはかなり荒いものだと感じたが、ヨーロッパからバタヴィア、日本を同じようにとらえるものとしては、適切なスケールということなのだろう。

江戸時代は鎖国（海禁）の時代ということもあって、ややもすれば国内に目が向きがちである。しかし、本書では、18 世紀末のオランダ東インド会社の衰退、フランス革命戦争によるオランダの敗北、それらのことと無関係ではないオランダ商館長の在任期間の長期化、それが鳴滝塾におけるシーボルトを中心とした蘭学の人脈の形成につながるといったように、ヨーロッパの動向が直接・間接に関係していることが示される。

また、ジェンナーの英語の著作は、発表後の数年間で、ラテン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、オランダ語、スペイン語、ポルトガル語に翻訳されており、アメリカでも著作が出版された。何事によらず、国境・文化を超えて広がるためにいかに翻訳が重要なのかをよく示しているし、それを可能にした大西洋を横断するような西洋世界の個人的・政治的・職業的ネットワークの役割の大きさ、そして逆にそこにつながっていなかった日本の状況にも注意したいところである。

カトリック教会と種痘の伝播の関係、植民地政策と医療、種痘が広がったとはいえまだまだ流行すれば数千～数万人が死亡した明治の社会の問題点など、いくつもの示唆を与えてくれた。日本語としても読みやすく、訳者の力量を感じさせる。